



ひめゆり平和祈念資料館

# 資料館だより



糸洲第二外科壕を訪れた津波古ヒサ証言員 2015年10月3日

第56号  
2015.11.30

## 目次

- ひめゆり平和祈念財団の新体制について……………1
- 資料館トピックス……………3  
ひめゆり平和祈念財団の事務局が資料館に移転／資料館の増築工事完了／第70回ひめゆりの塔慰霊祭／戦後70年特別企画「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」／教員向け講習会／夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話／教員のための展示ガイドツアー／ひめゆりの映像作品上映会／沖縄県博物館協会／戦後70年の報道について／「ウチナージュニアスタディー事業」平和学習
- コラム 相思樹……………8
- 研究ノート⑨ひめゆりの塔の歴史（前編）……………9
- 声……………11
- 本棚（仲程昌徳）……………12
- 仲宗根政善日記抄(52)……………13
- 資料館ガイド……………15

## ひめゆり平和祈念財団の新体制について

5月28日、ひめゆり平和祈念資料館を運営するひめゆり平和祈念財団（正式名称：公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団）の定時評議員会が開かれ、評議員と役員が改選されました（以下敬称略）。評議員に仲田美加子、比嘉正詔、玉那覇有紀、儀部和歌子、翁長安子、石川芳子の6人、理事に仲程昌徳、本村ツル、知念淑子、島袋淑子、仲里正子、諸見徳一、普天間朝佳の7人、監事に伊佐真人が選任されました。新代表理事には仲程昌徳、執行理事（館長）には島袋淑子が選ばれました。

## 館の歩みをまっすぐに継ぐ—戦後70年にあたって

ひめゆり平和祈念財団  
代表理事 仲程 昌徳

戦後70年にあたって、新聞、雑誌をはじめ様々な機関が、戦争を振り返る記事の連載や展示会、講演会等を開催していた。その様子は、館の一室に座っていても、よくわかったし、当館でも今年は、特別企画として「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」や「映像でたどる ひめゆりをめぐる沖縄戦の記憶—ひめゆりの映像作品上映会」等を行ない、多くの人々に参加、鑑賞して頂いた。



当館では、ご存じの通り、体験者に代わって説明員・学芸員が講話を行うようになっているが、70年特別企画の実行にあたって、その力量をいかに発揮したのではないかと思います。例えば、「戦跡めぐり」の沖縄陸軍病院壕跡での説明、糸数の壕内での説明、伊原第一外科壕入り口での説明そして荒崎海岸の岩の上での説明といったように、ひめゆり学徒たちのたどった戦場説明が、いくつもの場所で担当を代えてなされたが、それぞれに意を尽くし、聞いているものたちを感激させたのであった。

今回の「戦跡めぐり」も、体験者の方々に参加をお願いし、バスのなかで、彼女たちの体験を話して頂いた。要所、要所で彼女たちの話が、圧倒的なものであったことは、彼女たちの話をもっと聞きたいという強い要望が参加者から出たことにもあらわれているが、彼女たちの年齢を考えれば、多くの人々を前にして、いつまでも戦場体験を話せるという保証はないのである。

彼女たちに代わる話者をとというので説明員・学芸員の登場ということになったわけであるが、70年特別企画となった今回の「戦跡めぐり」は、これまで講話を受け持ってこられた体験者にも、説明員・学芸員が、その受け継ぎ役を立派に果たせるということを感じさせたのではなからうか。19年ぶりの70年特別企画戦跡めぐりは、その意味でも特別なものとなったとあっていいが、館の70年特別企画としてはあと一つ大きなものが残っている。「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」展である。

ひめゆり学徒隊の特徴の一つに引率教師たちの存在があったことを忘れるわけにはいかない。共に戦場

に出た教師たちと生徒たちとの過酷な時代の言動を検証していく事で、館は、また、新しい一步を踏み出していくことになるだろう。

戦後70年を機に、館の仕事に加わる事になった私に出来る事は、職員たちとともに、これまで館が歩んできた歩みをまっすぐに継いでいく事であろうと思っている。

## ひめゆり平和祈念財団を平和の砦に

ひめゆり平和祈念財団  
前代表理事 本村 つる

ひめゆり同窓会が資料館の建設を全会一致で決定したのは1982年のことでした。その後、「資料委員会」の委員長として、元ひめゆり学徒生存者の仲間たちと資料館の展示づくりに取り組むことになり、7年間の歳月を費やして資料館開館へ向けて準備をしました。

1989年6月23日、ひめゆり平和祈念資料館が開館して「証言員」となった私たちは、その達成感と、戦争体験を「伝える」という使命感に燃えていました。そんな証言員の一言一言は、来館する方々に命と平和の大切さを伝え続けてきたと思います。

私は2002年に、安谷屋良子館長のあとを継いで資料館館長となりました。そして2009年に安谷屋理事長が急病で休まれたので急きょ理事長兼館長となり、翌2010年には館長職を宮良ルリさんに引き継ぎました。

2011年、一般財団法人から公益財団法人への移行認定申請が認可され、新しい法律のもと公益財団法人として出発しました。今までの財団法人とはその組織が大きく変わり、法人としてより確固たるものとなりました。

そして2015年5月、私は任期満了で代表理事を退くことになりました。

思えばひめゆり同窓会が、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会として発足したのは、終戦から15年たった1960年でした。それから55年間、財団の理事はすべて同窓会員が務めてきました。しかし戦後70の年月を経て同窓会員の高齢化がすすみ、この財団を次世代へ引き継ぐために、このたび初めて同窓会員以外の仲程昌徳・普天間朝佳・諸見徳一の三氏が理事に就任することになりました。そして、代表理事には仲程昌徳理事が就任されました。

仲程代表理事は、故仲宗根政善先生のご名代として、かねてより理事就任をお願いしてきましたが、この度、理事長職をお引き受け下さることになり、私にとってその喜びは一入でした。仲程昌徳代表理事に感謝の一言です。

力不足な私がひめゆり平和祈念財団の代表理事として、6年間務めることができましたことは、偏えに同窓生の皆さま、財団を支えてくださった皆さまの御協力と御指導のたまものと感謝申し上げます。

戦争の悲惨さを訴え続けるこのひめゆり平和祈念財団が、いつまでも世界平和の砦としてますます発展しますことを祈っています。



# 資料館トピックス

## ◆ひめゆり平和祈念財団の事務局が資料館に移転

3月3日、ひめゆり平和祈念財団の事務局が、ひめゆり平和祈念資料館内に移転しました。これまで那覇市安里の事務所（ひめゆり同窓会館）に活動の拠点を置いてきましたが、財団業務の中心が資料館に移ったため、移転することになりました。

### ひめゆり同窓会と同窓会館

ひめゆり学徒の母校である沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校（略称：女師・一高女）は併置校で、戦前はそれぞれに別々の同窓会がありました。両同窓会は、学校敷地のすぐ隣に共有の同窓会館を有していました。沖縄戦により同窓会館は学校とともに失われ、その一帯には真和志村（現那覇市）によって市場がつくられました。同窓生たちは戦後いち早く同窓会の復活、同窓会館の再建を目指しました。



ひめゆり同窓会館 1968年

1948（昭和23）年4月、女師・一高女の両同窓会を合併した「ひめゆり同窓会」を結成。会館の敷地を登記するためには同窓会を法人化する必要があり、1960（昭和35）年4月6日、ひめゆり同窓会は「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」として認可を受けました。

1968（昭和43）年1月、もとの場所に鉄筋コンクリート3階建の同窓会館を建設しました。以後、同窓会館は同窓生の活動の拠点となり、後に資料館を建設する際にはその土地建物を担保にして、銀行から融資を受け、資金の一部としました。

1989（平成元）年6月23日、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会は、同窓生たちの力を結集してひめゆり平和祈念資料館を建設。

2011年6月、一般財団法人から公益財団法人に移行し、「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」となりました。

## ◆資料館の増築工事完了

資料館の出入口、ロビー、受付、事務所、および駐車場の増設工事が、5月に竣工しました。今回の工事は出入口の動線の改善、事務所及び駐車場の拡張を目的に行われたものです。

工事期間中、来館者の皆さまには騒音などでご迷惑をおかけしました。ご理解とご協力ありがとうございました。



資料館ロビー

## ◆第70回ひめゆりの塔慰霊祭

戦後70年の節目を迎えた2015年6月23日、ひめゆりの塔にて「第70回ひめゆりの塔慰霊祭」が開催されました。沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒・教師の遺族やひめゆり同窓会の会員、関係者など約400人が参列しました。

慰霊祭の前に、亡きひめゆり学徒・教師に鎮魂歌（レクイエム）を捧げ、平和への思いを新たにする「レクイエム・コンサート」が行われました。沖縄尚学高等学校・附属中学校合唱部（指揮比嘉千佳子氏、演奏山根貴志氏）による素晴らしい歌声がひめゆりの塔に響きました。



第70回ひめゆりの塔慰霊祭



レクイエム・コンサート

## ◆戦後70年特別企画「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」

戦後70年企画として、ひめゆり学徒がたどった道や壕を歩き、沖縄戦を追体験する機会として、7月11日に「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」を開催しました。定員の3倍を超える232人のご応募があり、抽選の結果、12～79歳の64名（県内58名、県外6名）にご参加いただきました。

当日は、ひめゆりの学校（女師・一高女）跡的那覇市安里に集合し、沖縄陸軍病院の壕がある南風原、糸数分室壕（アブチラガマ）をめぐり、ひめゆり平和祈念資料館で昼食、元ひめゆり学徒（証言員）の紹介などの後、伊原第三外科壕、ひめゆりの塔、伊原第一外科壕、荒崎海岸を訪れました。

資料館としては1996年の「第6回戦跡めぐり」から19年ぶりの開催で、前回までは元ひめゆり学徒が企画立案から当日の概要説明、戦跡の案内・証言までの全てを担当しましたが、今回は、元ひめゆり学徒が証言を担当し、説明員・学芸員が概要の説明や戦跡の案内を担当しました。



伊原第一外科壕の証言  
(琉球新報社代表撮影)

参加者からは、ひめゆりについては本で読んで知っていたが、ひめゆり学徒隊の動きを実際にたどることと理解が深まった、証言員から直接聞けてとても感動したとの感想が寄せられました。

さらに、テレビ局や新聞社など14社が同行取材をおこない、全国的に取り上げていただきました。全国の方に、元ひめゆり学徒の思いと資料館の活動を知らせる機会になったと思います。



証言員による自己紹介（琉球新報社代表撮影）



荒崎海岸で説明員の話に耳を傾ける参加者

## ◆教員向け講習会

8月5日に「ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会」を開催し、県内の小学校、中学校、高等学校の先生方など18人が参加しました。ひめゆり学徒隊と沖縄戦について理解を深めてもらうとともに、ひめゆり学徒隊をテーマにしたワークショップを紹介する機会にと、毎年この時期に実施しています。

ひめゆり学徒の戦争体験講話（島袋淑子館長）には、参加者から「直接体験者の話を聞くことの重要性」を感じた、体験者の「思い」が心に響いた、自分たちにはそれを子どもたちに伝える責任があるという感想が寄せられました。また、事前・事後学習のために、比較的気軽に取り組むことができ、また「ひめゆり」への関心・理解を持たせる方法として、5つのアクティビティ（ワークショップの手法）を提案しました。それについては、自身が感じたこと、考えたことを分かち合い、他の参加者の意見を聞くことで新たな視点が得られたという感想がありました。アクティビティの中では、特にフォトランゲージとランキングが好評で、すぐに学校で活用したいとの意見もありました。



参加者全員で自己紹介

## ◆夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話

8月13、14、15日に、夏休み特別企画として、一般の入館者を対象にした「元ひめゆり学徒の戦争体

「体験講話」を開催しました。元ひめゆり学徒の新崎昌子証言員、島袋淑子館長、仲里正子証言員が日がわりで登壇し、約50分程度、戦争体験をお話ししました。

今年度から、予約団体を対象にした元ひめゆり学徒による戦争体験講話は原則終了となっており、体験者の講話がきける貴重な機会とあって、3日間で425人の参加者があり、1回当たりの参加者数は例年以上に多く、毎回ほぼ満席となりました。

今年は、春先から問い合わせも多く、県外からお越しの方、3日間とも参加される方もいらっしゃるなど、関心の高さがうかがえました。テレビ報道を見て来場された方も目立ち、報道の効果が直接みえるかたちであられたことも今回の特徴でした。

来場者アンケートには、「体験者の肉声は想像以上のリアルさでショッキングでした」(52歳/男性)、「当時の方から話を伺うことの大切さを知りました」(28歳/男性)といった、体験者の話を直接聞いたことについて記されたもののほか、「その当時はわからなかったこと、後になってわかったことを話しておられたのが面白かった」(39歳/男性)、「戦争の中で怖いのは死に方だということを学びとりました」(11歳/女性)、など、知ったことについて記されたものも多くありました。また、多くの場所で宣伝してほしい、多くの人に伝えてほしい、といった、他の方にも知ってほしい気持ちをあらわしたものもありました。



8月14日の講話（島袋淑子館長）

## ◆教員のための展示ガイドツアー

8月23日、「教員のための展示ガイドツアー」を開催しました。学校の先生方に当館の展示を知っていただくこと、今年も夏休みに開催し、沖縄県内の小中高校の先生8名の参加者がありました。

普段館内で展示説明をしている説明員が、児童生徒たちの関心が高い展示を中心に、1時間程度ガイドツアーを行い、終了後に10分ほど、事前学習に活用できる資料の配布、当館が提供できる体験学習メニューの紹介、質疑応答などを行いました。

参加者からは南風原の陸軍病院壕内で手術も行ったのかといった、ひめゆり学徒隊の活動に関する質問や、戦争体験がない説明員はどのように勉強したのか、現在証言員（ひめゆり学徒隊生存者）は何名いるのかなど、多岐に渡って質問がありました。



説明員による展示ガイドツアーの様子

## ◆ひめゆりの映像作品上映会

9月19日(金)～23(水)に、戦後70年企画として、「映像でたどる ひめゆりをめぐる沖縄戦の記憶—ひめゆりの映像作品上映会」を開催しました。当館では、これまでにひめゆり学徒隊の沖縄戦体験を伝える証言を映像で記録し、いくつかのテーマで作品としてまとめてきましたが、企画展の上映用にまとめられたものが多く、普段はあまり上映する機会がありませんでした。それらの作品を、多くの方にご覧いただく機会をつくろうと企画したものです。5日間で10作品を上映し、352名の参加者がありました。多くが体験者の戦後をテーマにした作品でしたが、映像の中の体験者の語りを、涙をぬぐいながらじっと視聴される方々の姿がみられました。

## ◆沖縄県博物館協会

5月14日、15日の両日、沖縄県博物館協会の平成27年度総会及び春の研修会が、沖縄県平和祈念資料館を会場に行われました。1日目は、立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎氏による講演「沖縄戦の“記憶”の保存と継承のあり方」と県平和祈念資料館主査の古謝将史氏による事例報告1「“記憶”を繋ぐ、“記憶”を保存する、“記憶”を継承する」が行われました。



事例報告の様子

2日目には、「“記憶”の保存と博物館」というテーマのワークショップ、元南風原文化センター学芸員の上地克哉氏による事例報告2「沖縄戦における陸軍病院の臭気再現」、そして当館説明員の仲田晃子による事例報告3「体験がない人が何を語るのか—ひめゆり平和祈念資料館の新しい平和講話づくり」が行われました。

仲田からは当館の証言員たち(ひめゆり学徒隊生存者)のこれまでの活動や次世代継承の取り組みを紹介し、4月よりスタートしている次世代職員の平和講話の内容や課題を報告しました。参加された方からは、「ひめゆりの心とは何だと感じているのか」「学校との連携はどのように行っているか」などの質問があり、関心を寄せていただいている様子が伺えました。

## ◆戦後70年の報道について

戦後70年の節目にあたる今年、全国各地で戦争体験者の証言や後世につなぐための取り組みが関心を集めました。当館にも例年以上に取材依頼が殺到し、特に5・6月は毎日のように取材対応に追われました。

今回の報道の特徴として、女性向けファッション誌や週刊誌、海外の報道機関からも依頼があったことが挙げられます。次世代への継承をテーマにした取材も多数みられ、また、子どもたちに沖縄戦についての理解を深めてもらうための新聞社による子ども向け副読紙や別刷りの沖縄戦特集記事等の取材もありました。



これらの報道は、戦争や平和について考える大事な契機になったのではないかと思います。

2015年4月～9月 取材件数 87件（うち8件は海外メディア）

新聞（通信社含む）：37 テレビ：23 ラジオ：4 雑誌等（Webサイト含む）：23

## ◆「ウチナージュニアスタディー事業」平和学習

8月4日、沖縄県知事公室交流推進課主催の「ウチナージュニアスタディー事業」の一環として、平和学習を実施しました。沖縄から海外に移住した方々の子弟16人（アメリカ、ブラジル、ボリビア、ペルー、アルゼンチン、メキシコ、マレーシア、韓国）と県内の青少年17人が参加しました。

参加者は、資料館の見学とアニメ「ひめゆり」（英語字幕）鑑賞後、資料館で感じたことや「平和をつくるための方法」を話し合うワークショップを行いました。参加者から「命以上に大事なものはない」「教育を受けられない人たちに伝えていきたい」「違う価値観を認め合って、互いをリスペクトの気持ちで忘れてはいけない」といった意見が出るなど、話し合いを通じて、それぞれが大切にしたいことを考えたようです。



いろいろな言語で話し合う参加者

### 相思樹

#### 講話を行うようになって実感したこと

説明員 尾鍋拓美

今年の4月から、私たち戦争体験のない職員による講話がスタートしました。早いもので半年が経とうとしていますが、いまだに講話が始まる前は緊張して「チムワサワサー（胸がどきどき）」、終わった後は反省ばかりです。

そのことを、開館以来ずっと講話を行ってきた証言員の方たちに話すと、「私たちも何十年やっていても、毎回『あれも言えばよかった、これも言っていない』と満足することはない。だから、始めたばかりのあなたたちが思い通りできないのは当たり前」「場数をこなすこと、経験を積むことが大切」というアドバイスをもらいました。

証言員の方たちは、講話が始まる前にいつも、講話を聞く方たちの団体名や何県からの来館なのかを確認していました。事前にそれらの情報を知っておけば、話の中で、その県が沖縄戦やひめゆり学徒隊とどういう関わりがあるのかといったことを話すことができ、自分が住んでいる土地と沖縄戦との関わりを知ることができ、距離的にも心理的にも「遠い戦争、沖縄戦」が聞き手にとって少し近づくのではないかと、伝えるための工夫の一つなのだ、自分も講話をやるようになって実感としてわかりました。

証言員の方たちも、戦場での体験を話すだけではなく、そのような伝えるための工夫や努力を、経験を積み重ねながら実践し続けてきたのだと、より強く感じています。

「伝える」ということの難しさや、「どうやったらもっと伝わるのか」と試行錯誤を続けるのは、戦争体験があってもなくても同じだと思います。





## ひめゆり研究ノート⑨



# ひめゆりの塔の歴史(前編)

ひめゆり平和祈念資料館には、開館後、ひめゆりの塔の歴史について多くの質問が寄せられたため、「資料館だより」第15号(1996年)から第20号(1998年)にシリーズ「ひめゆりの塔の変遷」を連載し、それをまとめた『ひめゆり平和祈念資料館資料集1 ひめゆりの戦後』(2000年)を刊行した。しかし、非売品で、一般の方に見てもらえる機会がなかったため、ひめゆりの塔に関する基本情報を年表の形に整理し、紹介することにした。なお、年表をまとめるにあたって、新たな資料を追加し、出典を明記した(以下敬称略)。

### ひめゆりの塔建立まで

- ・1946(昭和21)年2月、真和志村民、米須一帯で遺骨収拾  
同年1月、真和志村(現那覇市の一部)の村民が米須(現糸満市)の米軍が引き払ったテントに集められ戦後生活をスタートさせる。村長には金城和信が任命される。2月25日以降、真和志村民は周辺の遺骨収集を開始。納骨所兼慰霊の塔として「魂魄の塔」を建て、納骨する<sup>1</sup>。
- ・同年3月中旬、金城和信夫妻、伊原第一外科壕や大田壕に入る  
金城和信夫人のふみは沖縄戦で消息不明になった二人の娘の行方を捜し回っていた。長女の信子は1945(昭和20)年当時師範本科2年生で自宅近くの駐屯部隊に徴用、次女の貞子は一高女3年生で沖縄陸軍病院識名分室に配属されていた。ふみは、陸軍病院の壕に食糧運搬をしていたという初年兵の津波次郎の案内で、ひめゆり学徒隊ゆかりの伊原第一外科壕や大田壕に入った<sup>2</sup>。
- ・同年3月中旬、金城夫妻ら伊原第三外科壕の遺骨や遺品を拾う  
金城ふみは、ひめゆり学徒隊生存者である比嘉文子(師範本科1年生、陸軍病院本部勤務)の案内で、伊原第三外科壕に入る<sup>3</sup>。その2、3日後、遺品・遺骨を収集するために、真和志村民7名が壕に入る。その後、金城夫妻は散乱していた遺骨や遺品を拾い、一つ一つ丁寧に洗ひ清めて白木の箱に収めた。白木の箱には金城和信

が「浄魂」と墨書して、引率教師であった仲宗根政善のもとへ届けた<sup>4</sup>。白木の箱に入っていたのはそこで亡くなった人全部の分の遺骨ではなく「焼きつくされて」「わずかに残る骨のかけら」だったという<sup>5</sup>。

### ひめゆりの塔建立

- ・1946年4月5日、真和志村民、ひめゆりの塔を建立  
ひめゆりの塔の命名<sup>6</sup>、揮毫は金城和信<sup>7</sup>。塔建立に先立ち、金城夫妻は田原惟信(後の真教寺住職)や仲尾次盛忠らと共に、山城の本部壕や伊原の壕、第三外科の壕へ御霊を迎えに行った<sup>8</sup>。米須の真和志村民居住区のテントの一つに「真照寺」が設けられる。
- ・同年4月7日、ひめゆりの塔除幕式と初の慰霊祭を挙行  
金城夫妻や真和志村民、近く同窓生などが集まって、塔の除幕式と慰霊祭を挙行。金城和信が祭文を捧げ、仲宗根政善が「いはまくらかたくもあらむ やすらかに ねむれとぞいのる まなびのともは」の歌を捧げた<sup>9</sup>。
- ・同年4月15日、真和志村民、「いはまくら」の歌碑を建立  
揮毫は田原惟信、刻字は山城正顕<sup>10</sup>。
- ・同年4月20日、真和志村民、豊見城へ移動<sup>11</sup>  
移動の際、金城ふみが二人の娘を詠んだ歌を塔に捧げる<sup>12</sup>。「悲しさのあまりに井戸までかけたれど 水汲みし子の足跡もなく」「信子よ貞子よいと子よ うちつれだちていづくへゆきし」「いつの日も花をたやすな村じゃ人 天つ乙女の姫百合の塔」
- ・同年7月ごろ、「陸軍病院第三外科職員之碑」建立<sup>13</sup>
- ・1947(昭和22)年、真和志村に真照寺が設けられ、白木の箱の遺骨を安置<sup>14</sup>  
米須にあった「真照寺」が真和志村に設けられ、学徒たちの菩提寺として位置づけられる。住職を仲尾次覚昌(後の聖現寺住職)に依頼する<sup>15</sup>。
- ・この頃、亡き学徒・教師の名を刻んだ石碑を建

立

同碑はこの頃に建立されたようであるが、正確な日にちは不明である。揮毫は宇良宗亀、刻字は山城正顕<sup>16</sup>。戦後間もないころだったため、戦死者全員の名前は記銘されておらず、間違っ

### 1948(昭和23)年 納骨堂建設

- ・同年4月、ひめゆり同窓会結成
- ・同年6月、与那城勇ら、納骨堂を建設  
糸満教会牧師の与那城勇らが米国民政府の援助を受けて、ひめゆりの塔の納骨堂を建設。屋根には十字架が立てられ、ひめゆりの塔(1946年建立)は納骨堂の前面に埋め込まれた。与那城は「石碑が建てられ、参道もつくられていた。が、上から洞窟の中を見下せば、壕内にまだ白骨が散在し、厳しい悲痛感が私の胸を締めつけた」という<sup>17</sup>。納骨堂には伊原第一外科壕や荒崎海岸などから収集した遺骨も収められた<sup>18</sup>。



ひめゆりの塔の納骨堂(1950年頃) 那覇市歴史博物館提供

- ・この頃、遺族により、「赤心の塔」が建立  
同碑はこの頃、建立されたようであるが、正確な日にちは不明である。揮毫は仲宗根政善。伊原第三外科壕で亡くなった民間人の大田家の遺族が、仲宗根に相談して慰霊の塔として「赤心の塔」を建立した。
- ・同年10月28日、「沖縄戦殉職医療人之碑」建立<sup>19</sup>
- \* 1949(昭和24)年6月、遺族らにより、荒崎海岸に「媛百合散華之跡」碑を建立<sup>20</sup>。その後台風により倒壊する。
- \* 同年9月、石野径一郎著『ひめゆりの塔』が雑誌「令女界」へ連載される。
- \* 1950(昭和25)年、第1回ひめゆり同窓会開催。議題は「①同窓会の敷地回収、②同窓会館の復元、③ひめゆりの塔整備のための募金、④役員選挙」だった。
- \* 1950年頃から、ひめゆりの塔の前に参拝記念の木札が

立ち並ぶようになった。

### 1951(昭和26)年 沖縄戦7回忌

- ・1951年3月5日、金城和信がひめゆり学徒・教師の位牌をつくり真照寺に安置<sup>21</sup>  
位牌はその後聖現寺へ移された。
- ・同年5月、ひめゆり同窓会がひめゆりの塔の敷地を購入  
購入資金は日系二世の儀間真一から寄贈された。儀間は土建業者を指揮して塔敷地を囲む塀の工事も行った。
- ・同年6月、納骨堂の上に玉那覇正吉が「乙女像」を建立<sup>22</sup>  
納骨堂の十字架跡に、玉那覇正吉制作による等身大の「乙女像」が設置された。玉那覇は乙女の座像もつくり、「乙女像」の横に設置する予定だったが、「乙女像」が10月のルース台風で倒壊したため、実現しなかった<sup>23</sup>。
- ・1952年6月、鳥取県の医師伊藤博が「女神の像」を寄贈<sup>24</sup>
- \* 同年7月、仲宗根政善『沖縄の悲劇—ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』刊行
- \* 1952(昭和27)年2月、本土中央紙で「沖縄の遺骨の野ざらし問題」が報道される。
- \* 同年8月19日、琉球大学にて第1回戦没者慰霊祭を開催
- \* 1953(昭和28)年1月、映画「ひめゆりの塔」公開

### 1956(昭和31)年 沖縄戦13回忌

- ・同年4月、静岡県の瓦職人鈴木啓治、「ひめゆりの石像」を寄贈
- \* 同年4月、第1回沖縄戦跡巡拝団が来沖

(学芸課 普天間朝佳)

※ひめゆりの塔の歴史(後編)は「資料館だより 第57号」(2016年5月31日)に掲載予定。

<sup>1</sup>: 新垣清輝著『真和志市誌』真和志市役所、1956、P264  
<sup>2</sup>: 金城ふみ著「あゝ、信子よ! 貞子よ! 沖縄の『ひめゆり部隊』に二人の娘を捧げた母の手記」『キング 1953年新春特別号』

<sup>3</sup>: 同上

<sup>4</sup>: 殉国沖縄学徒顕彰会編『沖縄の戦禍を背負いて』金城和信先生遺徳顕彰会、1982、P202

<sup>5</sup>: 仲宗根政善著『石に刻む』沖縄タイムス、1985、P120

<sup>6</sup>: 『沖縄の戦禍を背負いて』財団法人沖縄県遺族連合会、P203

<sup>7</sup>: 前掲『真和志市誌』 P265

※注記は次頁に続く

# 声

## 小学6年生の時に私自身の考えが変わった

宮城県 奥田星佳

私は宮城県に住む高校3年生です。

ひめゆりの塔平和祈念資料館には私が小学6年生の時に家族旅行の際に訪れました。実際に元学徒隊の方からお話を聞き、その時以来からとても戦争について興味を持ち、また私自身の考えが変わりました。

なぜ急にお手紙を書いたかという、去年の2月に私のひいおばあちゃんが亡くなりました。98歳でした。よく戦争中の話などを聞いていたのもう戦争の話の聞けないと思うと、とても悲しくなりました。偶然、ニュースでも元学徒隊の方が亡くなれば、戦争体験者の方が少なくなっているのを知って私の思いをどうか伝えたいと思い書くことにしました。私はあの時のお話をして下さった方の涙が忘れられません。当時何も戦争について知らなかった私はとても衝撃的だったのを覚えています。私の友達の多くは戦争について興味を持っていない、そしてあまり知りません。まるで遠い昔あった日本には関係のないことのように思っております。私はそんな若者に危機感を感じております。実際に起こったことから目を背け、それを風化させてはならないと強く思います。「命」の大切さ、尊さを分らない若者が多くなった今、戦争が再び繰り返されるのではないだろうか、不安に感じます。だからこそ、誰かが戦争の恐ろしさを伝えていかなければなりません。私は大学卒業後、高校か中学校の体育の教師になりたいと考えております。私は生まれも育ちも沖縄ではありませんが戦争のこと、ひめゆり学徒隊のことを後世に伝えることができればよいなと思っております。

もっと多くのことを学んで、自分のこの夢を実現できるように、まず目の前のことを必死に頑張ります。

急にお手紙を書いてすみませんでした。

これからも平和が続くことを心から祈っております。

<sup>8</sup>: 前掲「あゝ、信子よ！貞子よ！ 沖縄の『ひめゆり部隊』に二人の娘を捧げた母の手記」

<sup>9</sup>: 前掲『石に刻む』P123

<sup>10</sup>: 同歌碑の碑文に刻字

<sup>11</sup>: 前掲『真和志市誌』P266

<sup>12</sup>: 前掲『沖縄の戦禍を背負いて』P204

<sup>13</sup>: 長田紀春・具志八重編『閃光の中でー』1992、P248

<sup>14</sup>: 前掲『沖縄の戦禍を背負いて』P206

<sup>15</sup>: 前掲『沖縄の戦禍を背負いて』P206

<sup>16</sup>: 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会『続ひめゆり一高女師・一高女沿革誌続編ー』2004、P79

<sup>17</sup>: 与那城勇著『琉球エデンの園物語』琉球エデン会、1989、P88

<sup>18</sup>: 前掲『石に刻む』P127。ひめゆり平和祈念資料館蔵「仲宗根政善日記」1974年9月7日

<sup>19</sup>: 同碑の碑文に刻字

<sup>20</sup>: 「うるま新報」1949年6月13日の広告に「四周忌の

参拝をなし、引き続き、平良松四郎先生以下十二名最後の地点に記念碑建立せられるにつき慰霊の誠を捧げた」とある。

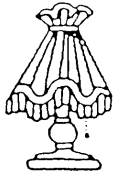
<sup>21</sup>: 「うるま新報」1951年3月6日。「姫百合同窓会では〈ひめゆりの塔が〉遠隔色々と不便な場合もあるので、ひめゆりの塔の(中略)ぼ提寺として建てられた真和志村寄宮の真照寺(中略)〈亡きひめゆり学徒の〉位牌を安置した」とある。

<sup>22</sup>: 宮良薫編『玉那覇正吉作品集』玉那覇吉子1985。巻末の玉那覇正吉年譜には「乙女像(立像)」とある。

<sup>23</sup>: 「うるま新報」1951年10月16日

<sup>24</sup>: 像の名札にこの名称がある。当時の新聞報道などには「幼き女神」「幼き女神像」という名称もあった。

<sup>25</sup>: 「琉球新報」1956年4月17日。当時の新聞には「ひめゆり像」などの記述も見られる。2009年ひめゆり平和祈念資料館開館20周年記念事業ひめゆりの塔域整備事業でこの名称を採用。



# 本 棚

仲 程 昌 徳

## 具志堅隆松『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ』

一九四六年四月、真和志村長金城和信は、石川のテント小屋にいた仲宗根政善に、七日「ひめゆりの塔の除幕式を催すから来るように」と、「トラックをその前々日によこして」くれたという。仲宗根は、金城の厚情に感謝し、喜久里真秀と二人米須へ向かった。除幕式を控えた日の朝、仲宗根は「魂魄之塔へ歩いて行った」といい、続けて「その裏は、われわれが、喜屋武断崖に追いつめられたとき、はるかに遠白く見えた白浜である。阿旦をわけて浜に出た。青い海がひろがり、白波がよせていた。波打際に歩いて行ってぞっとして立ちすくんだ。無数の遺骨が、波にころころと音をたててころがっているのである。そばの針山のような、岩の上にも、無数の遺骨が打ち上あげられていた。現実とは思えない。まるで地獄にまよいこんでいるような白昼夢をみているようであった(仲宗根政善「遺骨を背負うた生涯——金城和信氏を悼む」)と書いていた。

仲宗根が、そのとき見た「波にころころと音をたててころがって」いた遺骨、「針山のような、岩の上」に「打ち上あげられていた」無数の遺骨は、その後、一体どうなったのだろう。

沖縄における遺骨収集の経緯については北村毅の『死者たちの戦後史 沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』(二〇〇九年)や浜井和史の『海外戦没者の戦後史 遺骨帰還と慰霊』(二〇一四年)にくわしい。両者によれば、一九五二年二月上旬沖縄から二一一体の遺骨を持ち帰った民間人が、沖縄の山野には旧軍人の遺骨が「全く野ざらしに等しい状態」で散らばっていると発言したことが新聞で報じられたことから、「沖縄の遺骨の状況が、全国的な注目を浴びることになった(北村)という。そしてその「野ざらし」発言直後の一九五二年三月には、政府は調査団を派遣し、島尻、伊江島、慶良間列島等の調査を行うことになるが、遺骨の収骨は、金城が、村民を率いて行き、「魂魄之塔」を建て、供養していたように戦後すぐに始まっていたし、五一年十月頃には、日本政府からの遺骨調査団が派遣されてくるということを知った「仏教関係者」たちによってもなされていた。

仲宗根が、ひめゆりの塔の除幕式の朝、目にした

無数の遺骨は、地元住民による収骨にはじまり、その後、政府の派遣した「遺骨収集団」によって収骨され「今日に至っている(浜井)のだが、栗原俊雄が二〇一四年夏、沖縄県に「戦没者のうち、まだ収容されていない遺骨はどれくらいあるのか」と問いあわせたところ、「三二〇九柱」という回答を得たという(『遺骨 戦没者三一〇万人の戦後史』二〇一五年)。そして栗原は、仮にその回答が「正しかったとしても、正確な戦没者数が分からない以上、いったいあと何人の遺骨が残っているか、分かるはずがない」と付け加えていた。

栗原は、同著で「ガマフヤー」を自称する具志堅隆松とその仲間たちが、那覇副都心として開発を進めていた真嘉比地区で「二〇〇七年から二〇一一年にかけて、およそ二四〇柱もの遺骨を収容した」ことについて触れていたが、そのような収骨報告がまだなされていることからしても、栗原の疑問は、当然と言うものであった。

「いったいあと何人の遺骨が残っているか」、その実数の確認ももちろん大切だが、具志堅たちが「ガマフヤー」をしているのは、決してそのためにだけではなかった。『僕が遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。サトウキビの島は戦場だった』(二〇一二年)は、「遺骨」が何を語っているかを伝えようとしたものである。例えば、首里地区までの激戦地で見つかる遺骨は、ほとんどが軍の装備品をつけているのにたいし、首里以南に見られる遺骨は、老人や女性、子供が多いこと、遺骨のお腹の真ん中あたりと思われるところから五銭硬貨が出て来ること、さらには「信管に打撃痕が残る不発の手榴弾が遺骨とともに出て」くるといった発掘現場から浮かびあがって来るのは、沖縄戦の実態であり、家族が兵士に託した思いであり、強制された死の姿である。具志堅が「ガマフヤー」になったのは、そのような「遺骨の声なき叫び」を伝えたいという思いによっていた。そしてそれは「戦死を美化することは、過去の過ちを過ちと認めず、反対にそれを誇ることであり、戦争を認め受け入れることにつながって」いくという真つ当な認識と結びついていた。

## 仲宗根政善日記抄(52)

[1980年] 四月六日

朝早く知らない方から電話があった。沖縄の悲劇を読んで感銘して、わざわざ本をたずさえてお参りして来たとのこと、署名してもらいたいし、お会いもしたいが、お声だけでもと、失礼ながらお電話をしましたとのこと。こうしてお参り下さる方のあることを知りうれしかった。錦織清さんのことも浮んだりした。あの書物を大切に読んで下さる方々のおられることも知り、今度、再版するようになってよかったとも思った。(中略) こういう方が、長野にもいらしてくれて有難い。

終戦直後、灯火もない時代に、書きなぐったものであり、しかも きびしい軍政下で、翻訳をして軍の許可をえなければならぬ時代で、こっそり軍の検閲をくぐって出したので意にみたないことが多いが、それでも、終戦直後の心情は出ていると思う。

七月から十一月まで朝日新聞社と沖縄タイムスがタイアップして、「ひめゆりの乙女たち展」を催すことになっている。内容は、沖縄戦の実態を一般国民に知らせて、現在の右傾化に警告を与えようというのである。趣旨は賛成だが、いつも「ひめゆり部隊」を表看板にされるのはこのましくない。沖縄の学徒隊の行動全体がぼやけるどころか、住民の悲惨ささえかくれてしまう。

先日、白梅の塔にお詣りした。先に植えた鳳凰木二本だけはもうずいぶん伸びていた。しーんとして人影もなく、塔ばかりがしらじらと空につっ立っていた。静かで、乙女たちがやすらかに眠るにはよい。二高女の生き残りたちや同窓生たちは、訪ねる人もいないことをさびしく思っているともいう。あるいは一面そういうところもあるかもしれない。しかし、今のひめゆりの塔の雑踏を思うと、むしろ、こうした静寂なおくつきに乙女らを静かに眠らせたいとも思う。

白梅之塔から波平部落へむかった。五月の下旬から六月十八日まで、われわれは、部落前方の丘陵の横ばらに掘られた、二つの壕にわかれて、退避していた。行った当初は、五月の新緑に蔽われた昔ながらの美しい野原だった。ところが日一日と爆撃ははげしくなって、見る見る中に焼野が原になって行った。壕の入口から毎日毎日変わり行く戦野を見つめていたのである。

今では壕もすっかり樹木におおわれて跡形もない。こんな野にあのようなむごたらしい戦争があったなどとは、もう想像もつかない。波平から伊礼、伊原に通ずる切割がある。

南風原陸軍病院は、重傷患者は、壕に残して、歩ける患者だけをひきつれて、摩文仁〔注1〕に移動した。残された重傷患者たちは、青酸加里を入れて配られたミルクをのんで最期をとげたが、中にはあきらめきれずに壕をはい出たものがいた。

病院移動の日から十日もたった頃だった。よれよれの服をまとった三名の傷病兵が、あの切割のところに立っていた。私が近づくと、陸軍病院はどこですかと尋ねていた。私は返答に窮した。すでに病院は患者たちに各自原隊に帰れとの苛酷な命令を出している。患者を収容出来る壕としては一つもない。南風原から、砲弾をくぐり、でいねいの道をやっと歩ける三名の患者たちが、病院について行けば必ずたすかると、喘ぎ喘ぎここまで命からがらたどりついたのである。

疲れきって倒れそうに立っている三名が、陸軍病院はどこですかと尋ねているのである。私は彼らにどうしても、病院の解散になったことを知らさなければならなかった。私のことばもふるえていた。

彼らはそれを聞くやそのまま地べたに倒れ伏した。そばには、生徒の壕があったが、生徒だけで超満員であった。施すすべもなかった。その後、この三名がどうなったのか。おそらく生還したとは考えられなかった。南風原の壕を出て、ここ摩文仁までたどりつけたのはまだいい方だった。あの熾烈な砲弾の雨をくぐっていったいどれぐらいの患者が摩文仁まで、たどりつけたであろうか。陸軍病院にどれほどの患者が収容されていたかは推定も出来ない。彼らの一人一人が一体どのようにして最期をとげたのか、人間の想像では、とてもはかり知ること出来ない無惨な末路であったであろうことだけは想像出来る。

あの切割を通るたびに、いつもあの三名の傷病兵のよれよれ姿が眼に浮ぶ。

やがて切割を通り過ぎると展望がひらけて、山城の部落やその背後の丘陵が眼にはいる。今では路の両側には家がない。

六月二十六日、南風原陸軍病院から移動した翌

日であった。その朝豪雨にぬれそぼちながら糸洲部落に移動したが、夜になって、糸数〔注2〕は砲撃の目標になるにちがないから、移動せよとの命令を受けた。生徒も看護婦も疲労こんぱいしてほとんど動けなくなっていた。艦砲が襲うとなれば、一刻もそこでじっとしているわけには行かない。負傷している生徒をひきつれて、虫の歩みのように夜道をたどって行った。伊礼と伊原〔注3〕の間の道路にさしかかった。くらやみで、家の建っていることもわからなかった。ただぬれそぼった竹が道に垂れさがって顔にかかった。その記憶が今もはっきり残っている。そこに泉が湧いていたことも知らなかった。

この泉に県病院の院長平良肇、副院長 嵩原安春に引率された看護婦たちが、小休止をして、清水をすくい飲んでいるときに、爆撃されて多くの犠牲者を出した。平良院長が重傷を負い、嵩原副院長は即死した。嵩原副院長は、県立第一中学校での同期生であった。彼は与那原の出身で、身体も強健で、柔道は青帯で、よく二人で稽古した。慈恵医大を出て、副院長をつとめていた。平良進君と比嘉堅昌君（第一外科診療主任）と大宜見朝計君四名で葬った、黒くふくれあがって、ほとんどその顔の見わけもつかなかった。県病院の現金であったのだろうか、胸に札束がいっぱいはいついた。部落の一番後方の屋敷のすみに葬った。戦後、この地を訪ねて弔った。嵩原安春戦死の地と、後方の岩の上に碑を建てたが、今はそれもなくなっている。

そんないろいろの戦争中の思い出を浮べながら、ひめゆりの塔に行った。観光客で雑踏している。人のたえることが全くない。

「ひめゆりの塔の記」の碑の写真をとりに行ったのだが、はっきりなしに、観光客が前に立ちふさがる。碑に腰かける。どうしても写真がとれないので、優美堂でしばらく休み、再び出かけて行ったが、とうとうひめゆりの塔をバックにしてとることをあきらめて、部分写真をとって帰った。

白梅之塔を訪ねて来たばかりなので、あの雑踏にはあきれかえった。ひめゆりの塔を作ったのはよかったのかとも反省させられた。かえりみる人もなく、くさむらにうもれてしまうのではないかと心配したのであった。

金城文子女史は、

いつの日も花をたやすな村じゃ人  
あまつ乙女のひめゆりの塔

と板にかいて松の小枝にかけて、荒廃して行くのを気遣って祈りをこめたのであった。

この地が真に平和の原点になることが出来ればと祈りつづける。

〔1980年〕四月八日

さきにホワイトビーチに米原子力潜水艦ロングビーチが寄港したとき、高放射能が検出されて県民に多大な不安を与えた。昨日、科学技術庁は、その検査結果を発表した。原因は究明できない。分析結果からは判断不可能であると、ますます県民に不安を与えた。

「原因はロングビーチによるとも、そうでないとも断定できない。しかし他の原因によるものという原因が見つからない」とことばでごまかしている。セシウム137を検出し平常時よりも37も高いのははっきりしている。「その結果が放射性物質によるものであると想定しても、その量は極めてわずかなものであり、かつ周辺の一般的なバックグラウンド放射能の増加はないことから放射能による環境への影響はないと判断する」発表をしている。

アメリカ潜水艦の寄港を容認し、それを容易ならしめる発表であり、米軍を追及することをいっさいさけている。このような態度はいついかなる事態を生ぜさせられるかしの危険性をはらんでいる。昔から青く澄んだ海である。海上彼方にニライの楽土があると信じて来た海である。今近代兵器によってこの海は毒されつつあり、人類破滅へと一歩一歩すすみつつある。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

〔注1〕 摩文仁：摩文仁村。沖縄陸軍病院は糸満市の山城・伊原・波平（現南波平）・糸洲に撤退した。戦前、伊原と波平は摩文仁村であり、南部への撤退を「摩文仁に撤退」と表現されることもあった。

〔注2〕 糸数：糸洲の誤りか。

〔注3〕 伊礼と伊原：伊礼と石原の誤りか。伊礼と石原が戦後合併して伊原になった。

# 資料館ガイド

## ◆平和講話・証言ビデオ・アニメ視聴ご案内

ひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約45分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。下記の時間でご予約下さい。

【講話】	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	
【ビデオ】	9:10	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00 16:00

※お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分)

○アニメ「ひめゆり」(30分)

※毎週月曜日・年末年始(12月30日、31日、1月1日～3日)・旧盆(旧暦7月13日～16日)は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後(6月21日～24日)は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 最大収容人員：200人(席)
- 資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。
- 多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的(セレモニー等)には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせて頂くこともございます。

## ◆VTR室のご利用について

下記のビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分 1994年)
- ◇アニメ「ひめゆり」(30分 2012年)
- ◇「ひめゆり学徒の戦後」(33分 2003年)
- ◇「仲宗根政善～浄魂を抱いた生涯」(30分 2001年)
- ◇「戦火に消えた21の学園」(26分 1999年)
- ◇「生き残ったひめゆり学徒たち」(28分 2012年)



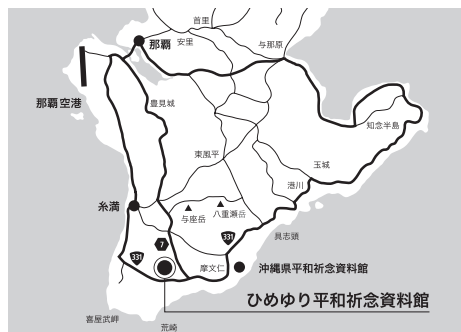
多目的ホール

## ◆資料館ご利用案内

- ①入館受付 午前9時～午後5時(閉館は午後5時25分)
- ②休館日 年中無休
- ③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110  
団体料金(20名以上) 大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

### ④交通

- 【バス】旭橋・那覇バスターミナルから[89]で約30分、糸満バスターミナルで[82][107][108]に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前下車
- 【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前(糸満・豊崎向け)バス停で[89]に乗車し、約20分。糸満バスターミナルで[82][107][108]に乗り換え、約15分、ひめゆりの塔前下車
- 【車】那覇空港より約30分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第56号

2015(平成27)年11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>